

## ドラッカー・ブックレビュー

### 一読の価値ある“ドラッカー本”

國貞克則著 『究極のドラッカー』 角川書店

評者 大木英男

「もしドラ」を機に、ドラッカー関連本が数多く出版された。それらはいろいろな角度からの著作あるいは翻訳で、ドラッカーが幅広い領域で活躍してきた証左であるといえるだろう。出版されたドラッカー関連書籍は、ドラッカーに造詣が深い学者によるアカデミックな著作、ドラッカー思想に関するもの、マネジメントに関するもの、ドラッカー入門的なものなど多様である。ここにきて、ひとわたり出揃ったという観であろうか。

そうした中で、本書「究極のドラッカー」は、ある意味でドラッカー関連本の一般領域における「総括」的なポジションであるともいえる。つまり、「ドラッカー経営学」について思想・理論の要諦を抑えて説明しつつ、著者独自のドラッカー観を随所に加えている。

本書の前提として、著者はドラッカーの本質として5つのポイントをあげる。すなわち、「幅広い歴史観と世界観から本質を見抜く」「社会全体を生き物として見抜く」「Perceptionを大切にする」「ドラッカー思想の系譜」「人の幸せを願う心」である。これらを基本軸として、組織・マネジメント・イノベーションなど各論編が展開されていく。

著者の國貞克則氏は「財務3表一体分割法」などの著書で知られる対中小企業コンサルタントである。同時にクレアumont大学ピーター・ドラッカー経営大学院でドラッカーに学びMBAを取得しており、ドラッカー思想・理論やその人となりを知っている。

著者は「私はピーター・ドラッカー経営大学院の卒業生ではありますが、そもそもドラッカーの大ファンではありませんでした」というくだりがあり、それがなぜ熱烈なドラッカーファンになったかは興味ある記述といえる。

また、本書には約20のコラム欄があり、ドラッカーに身近に接した人でないとわからない話が挿入されている。そのひとつである「ドラッカーは会計が苦手だったのか」などは、著者ならでの見方だろう。

いずれにしても本書は、「ドラッカー本」が一巡したかの観がある現時点で、読んでおく価値のある著作といえるだろう。